

『狭衣物語』における物語展開の方法

——通過儀礼の果たす機能——

豊 島 秀 範

一 問題点の所在

『狭衣物語』の当初の主題は、主人公狭衣大将の、源氏宮に寄せる／＼永遠の思慕が、その基調をなしているところに求められる（１）。それは『源氏物語』における、光源氏の藤壺に対する思いに比類する。また、『宇津保物語』での、貴宮と仲純との関係、貴宮と仲忠との関係などに似た構想でもある。『狭衣』にみられるこの種の先行作品との関連は、一、二点に留まらず、多くの類似点が概に指摘されていることは、周知の通りである（２）。そのために、『源氏』の二番煎じ的な作品であると見做される。しかし、それは『狭衣』だけではなく、『源氏』以降、ほど遠からずして書かれた物語のほとんどに与えられた、宿命的な評価でもあった。

今日的に見れば、作品の構想が酷似していることはマイナーの評価であるに違いない。だが、それにもかかわらず、『狭衣』『寝覚』『浜松』を初め、散逸した物語をも含めると、かなりの数の作品が書き継がれていた。そこに秘められたエネルギーの総体とは、いったい何であったのだろうか。物語史に興味を持つ立場の者としては、是非とも見定めねばならないことであると思っている。そのような視点を秘めながら、ここでは、『狭衣物語』が獲得した、物語の方法について、若干述べてみたい。

『狹衣』の重要な特徴の一つは、冒頭文が『和漢朗詠集』上・春にある白樂天の詩句を引用することで始められている点に象徴されるように、漢詩・和歌の引用が極めて多く含まれていることにある。物語と和歌との関連は、『宇津保』『源氏』などでも、物語世界を構築する上に、重要な要素となっていた(3)。それを『狹衣』においては、さらに推し進めることで、物語の質的な面に強く関与しているわけである(4)。

『狭衣物語』は、一巻の分量が多く、また、巻一・二と、巻三・四とは分量が違う。そこで比較する便宜上、「日本古典全書」の分類に従って、巻一・二を各々上・下に、また、巻三・四をそれぞれ上・中・下に分け、全体を一〇段に区分することにする(6)。

卷数	頁数	通過儀礼	年中行事	公事	臨時の行事
卷					
段					
三八	源氏宮誕生				
四〇	源氏宮父母の死				
四二			五月五日の節会		
七二	飛鳥井女君父母の死		内裏での節会		
七五	(狭衣と飛鳥井女君と契る)				
八四					
			・なをしもの		

卷三		卷二		卷一	
上	段	下	段	上	段
二四〇	二二一	二〇八	二〇一	一四七	一三一
飛鳥井女君の死 飛鳥井女君の法要(狭衣) 飛鳥井女君女子出産		飛鳥井女君の死 飛鳥井女君の法要(狭衣) 飛鳥井女君女子出産		飛鳥井女君の死 飛鳥井女君の法要(狭衣) 飛鳥井女君女子出産	
		大嘗会		賀茂祭	
		齋院交替(女一宮) 源氏宮、齋院 女三宮、齋院 齋院御襖の儀(初齋院)		五月五日の夜	
		高野・粉河詣(狭衣)		行幸	

四				卷		三				卷数	
段		上	段	下	段	中	段	上	段	頁数	
三九六	三九四	三九二	三九一	三七七	三七〇	三六八	三六九	二四九	二四六	二四三	
・女院の薨去				・女一宮の内				・飛鳥井女君の死 ・女君の四十九日 ・女君の女子の百日の祝 ・女君の法要(狭衣)			
				・賀茂祭				・納涼(狭衣・若宮)			
				・相嘗の神事(斎院)							
				・斎院御楔の儀(本斎院)							
				・曼陀羅供養(女二宮) ・法華八講							
				・賀茂詣(堀川大殿)							
				・行幸(帝↓女院・母)							
				・女一宮、中宮							
				相撲の節会							
				新嘗祭の五節							
				春宮の元服							
				・宰相中将の母君出家							
				・母君の逝去							
				・母君の法要							
				・女御子の産養							
				・女一宮の女御子誕生							
				・御湯殿の儀式							
				・女御子の産養							

中		巻		下	
四〇〇	・狭衣、宰相の妹君と契る	四三五	・宰相妹君入内(藤壺)	四四七	・女二宮の若宮、元服
四一四	・粥杖の祝(狭衣)	四三七	・大嘗会の五節	四四五	・飛鳥井女君の姫君、装着
四三〇	・後一条帝讓位	四三九	・賀茂祭	四四四	・藤壺の二の宮の袴着
	・狭衣即位	・藤壺、皇子出産		・飛鳥井女君の姫君、装着	
	・斎院御禊の儀	・一品宮、出家・薨去		・常磐尼君の逝去	
	・藤壺女御立后			・飛鳥井女君の供養	
	・行幸(帝↓堀川殿)				
	・行幸(大原野・春日・賀茂へ)				
	・行幸(平野へ)				
	・行幸(嵯峨院へ)				

(頁数は「日本古典文学大系」本による。行事名の上に・印のあるものは、文中に比較的詳しい記述のあるもの。無印は、簡単な記述のもの。()) 内は関連記事を示す。

△表1Ⅴを一瞥することで、どのような人物が、どのようにに登場し、物語と関わっているかが、ほぼ理解できる。それだけ、物語の内容がこれらの諸行事に密接に依存しながら展開されているということである。

ところで、それらの行事を、数と比率とを以って示すと、△表2Ⅴのようになる。

行事の総数は八八例である。これは、『宇津保』二六五例、『源氏』二七〇例と比較すると、数の上では極端に減少している。しかし、『狭衣物語』の全体量が、『宇津保』の約三分の一、『源氏』の約五分の一に相当することを考慮すれば、『狭衣』の八八例は、決して少ない数ではない。率の上では、『宇津保』とほぼ同率、『源氏』よりはむしろ上回っているのである。その限りでは、『宇津保』『源氏』に見られた物語

△表2▽

	卷 四			卷 三			卷 二		卷 一	通過儀礼 年中行事 公事 臨時の行事
45 (51%)	19(3)			13(2)			10(1)		3(3)	
	10(2)	4	5(1)	2	5	6(2)	8(1)	2	(3)	
15 (17%)	5(3)			3			3(3)		4(3)	
	2(1)	1	2	2	1		(1)	(2)	2(1) (2)	
15 (17%)	5			1			9(3)			
	4		1	1			9(3)			
13 (5%)	8			2			2		1(1)	
	6	1	1	2			2		(1)	
	22	6	9	7	5	7	20	4	3 5	
	37			19			24		8	

(注) 数字は行事数を示す。()内の数値は、行事のうちで簡単な記述のみのものを示す。各巻内の区分は、『日本古典全書』の段数による。

世界の構築の方法を、『狭衣』も継承しているといえる。そこに『狭衣』の構造の一端を窺い得る。

だが、行事の内容を考え合わせると、『宇津保』に対して『源氏』がそうであったように(7)、『狭衣』も、前二者と比べた場合に、各々の行事間に比率の増減があり、さらに、物語との関わりの上でも違いが認められる。『狭衣物語』においては、△表2▽でもわかるように、△通過儀礼▽が約半数を占めている点が注目される。

△年中行事▽は各巻にほぼ均等に描出されているが、『宇津保』の四七%、『源氏』四〇%と比較して、その比率は激減しているところに特徴がある。つまり、『宇津保』『源氏』は、年中行事によって形成される時間と空間とに相当に依存することによって、物語世界が構築されている場合が少なくなかった。そのような年中行事の働きが、『狭衣』には認められにくいということである。そして、この傾向はこれ以降の物語において、一層顕著になってくるのである。△公事▽と△臨時の行事▽とは、巻によって極端な差がある。そこで、圧倒的多数の△通過儀礼▽を中心として、他の行事とも関連させながら、具体的に検討してみる。

三 通過儀礼の物語における機能

『狭衣』に描かれた△通過儀礼▽の数は四五例。行事総数の五割を超える高率は、いったい何を物語っているのであろう。『宇津保』『源氏』が各々三七%・四〇%であることと比較すると、まさに重要な特徴の一つである。しかも、△表2▽に

	巻 四			巻 三			巻 二		巻 一		
	下	中	上	下	中	上	下	上	下	上	
5 (11%)	1	1		1	2						結婚に 関して
11 (24%)	1		3			2	2	2		1	誕生に 関して
7 (16%)	4		1		2						成人に 関して
4 (9%)	1		1				2				出家に 関して
18 (40%)	3	3		1		5	4			2	逝去に 関して
19			13			10		3			

△表 3 V

示すように、巻が進むにつれて、三・一〇・一三・一九例と、その数が増加する。それは、第三・四巻が、第一・二巻よりも物語の量が多くなっているからだというだけでは充分ではない。また、三、四巻と進展するにつれて、作者の描写叙述の技倆の進歩老熟に伴い、微細な点にまで筆が及んだこと、および、後にゆくほど登場人物の数が増してきたために、予定に反して、自ずと記述を必要とすることが多くなったからだという指摘は（8）、一面ではその通りである。だが、それも充分には正しくない。この点は、後述するように、物語の主題の変化と絡んで、重要な要因を含んでいる。比率で『宇津保』の一・五倍、『源氏』の二倍という数値が示すように、それ程に多くの通過儀礼を取り扱わなければならないのは何故であるのか、という疑問が生じる。同時にまた、そうすることで形成された『狭衣物語』の世界とはどのようなものであるのか、という問題を考えてみなければならない。

△出家・逝去Vの記述によって、人物が物語世界から消去される。その人物に絡む物語の終焉である。一方、△結婚・誕生（出産）・成人Vに纏わる行事は、新たな人物を物語に登場させる。いわば、新たなプロットの設定を意味する。以上のことは一般的に言える。事実、『宇津保』にも『源氏』にもそのことは認められる。人物を登場させ、また、消去するために、このような手続きを踏まねばならないということ自体、物語作品の質的なものを考える上には重要な問題である。

『狭衣』は通過儀礼の機能を充分に発揮した作品である。だが、そのあまりの数の多さは、ときには充分にその機能を果たせぬままに、物語に組み込まれている場合が、『狭衣』にはある。また、一年間という比較的短い期間に、二二例もの△出家・逝去Vに関する記述があることも、物語の世界、そしてその主題を考える場合に、銘記する必要がある。それらのことを念頭に置きながら、△表3 Vの分類を参考にして、以下に述べてみる。なお、『狭衣』の筋の運びを考慮して、巻ごとに述べていく方法をとる。

(一) 源氏宮・飛鳥井女君の物語——主題の提示——(巻一)

源氏宮は、物語が始められてまもなく登場する。

源氏の宮と申すは、故先帝の御末の世に、中納言の御息所の御腹に、類なく美しき女宮の生まれ給へりしを、(故先帝は)末にならせ給へるに、今更の絆を心苦しく思ししほどに、(源氏宮が)三つにならせ給ひし年、(父の)院も、母御息所も、うち続きかくれ給ひしかば……。(9)

と、先帝の晩年に誕生した、類まれな美貌の源氏宮は、三歳で両親を失う。誕生(二例)と逝去(二例)とを一挙に記すことで、源氏宮の孤独な状況を設定する。この方法自体は、物語にみられる常套的手段である(10)。同じく巻一に登場する飛鳥井女君の場合においても、

この女君は、帥の中納言といふ人の女なりけり。親達は皆亡せにけり。乳母、かの主計頭といふ者の妻にて、なま便りあるが、(飛鳥井女君に)思ひかしづきて年頃過ごしけるを、そのをとこの(主計頭が)亡せて後は、(乳母は)いとわりなき有様にてぞありければ、仁和寺の威儀師といふ者を語らひて、この(飛鳥井の)君の事を扱はせけるに、(威儀師は)おほけなき心ありて、人知れず(飛鳥井を)思ふ心つきて、かかるわざをしけり。(七二頁)

と、やはり孤独な身の上を記すところから、その物語は始まるのである。つまり、以上の逝去の記述は、源氏宮・飛鳥井女君の登場の契機となつているのと同時に、その後展開される物語に、ある条件を与えているのである。殊に源氏宮の場合は、故先帝の妹である堀川上(狭衣の母)に引き取られ、狭衣と兄妹のようにして育てられることになる。その結果、狭衣は、源氏宮に恋情を抱き始め、その思いは、

いろいろに重ねては着し人知れず思ひそめてし夜半の狭衣(五二頁)

の歌に象徴されるように、物語の主題的要素として据えられるのである。

源氏宮は、巻一の初めから登場し、主題的要素を担う女性である。また、飛鳥井女君は、巻一の後半以降に登場する。そして、狭衣の源氏宮に寄せる思慕に貫かれる物語の主題が早くも変更したかに思われるほど、物語のプロットは一途に飛鳥井女君に焦点を絞っていくのである。巻一の最後の部分に至って、飛鳥井女君は狭衣の子を身籠る。そして、誕生した子供(女子)と共に、巻三以降に引き続き語られる、重

要人物の一人なのである。この両者は、各々の物語の質は異なるが、いずれもほぼ同様の状況を設定されて登場したのである。そこに、過去に遡ってその出自を明示するべく描かれた、逝去に関わる記述の持つ意味があったのである。

(二) 女二宮の物語——心ならぬ仲——(巻二)

巻二には、一〇例の通過儀礼の記述がある。そのうち、誕生に関するものは、次の四例。

○女二宮に男子誕生。○その産養の祝い。○七日夜の祝い。○五十日の祝い。

また、出家・逝去については、

○大宮の逝去。○その追善供養。○四十九日の供養。○女二宮の出家。○帝(嵯峨院)の出家。○一条院の崩御。の六例である。

以上の中で、一条院の崩御を除く(後述)九例は、密接な関連を保って、狭衣と女二宮との物語の展開に関与している。つまり、女二宮が、誰れの子供とも知らせずに狭衣の子を生むことで、母大宮(皇太后宮)は困惑に陥る。生まれた男御子は、母・女二宮の弟として、大宮と帝(嵯峨院)との間の子供として育てられる。しかし、女二宮とその父嵯峨院とは出家し、母大宮は狭衣を恨みながら逝去するという結果を招くのである。

女二宮は、帝にとって、「二の宮は御かたち・心よりはじめて、めでたくおはしますを、上は、取り分き限りなく思ひかしづき聞えさせ給ひて」(四七頁)とあるように、「御心に類なく思ひ聞えさせ給ふ」(同頁)姫君であった。狭衣の笛に感動した帝は、その姫君を狭衣に与えようとして、狭衣に歌を詠みかける。「身のしろも我脱ぎ着せんかへしつと思ひな侘びそ天の羽衣」(五〇頁)、つまり、天人の迎えを辞退させた代りに、女二宮を授けようというのである。しかし、狭衣は、

紫の身のしろ衣それならば少女の袖にまさりこそせめ(五一頁)

と、ひたすら八源氏宮への思いをを抱き続けるのである。両親の「かの(帝の)御気色ありし身の代衣しろころも(女二宮)は、いとかたじけなきことにこそ」(六〇頁)という訓戒にも耳をかさず、

ほかさまに藻塩の煙なびかめや浦風あらく波は寄るとも（六〇頁）

と、源氏宮以外の女性には決して思いを寄せまいとする、狭衣の固い決意を示すことに終始するのである。

以上は、巻一前半部分においてのことである。その後、飛鳥井女君の物語を間に挟んで、巻二に入るとすぐに女二宮の話が再浮上する。そしてまだ正式な婚儀のないままに、狭衣は女二宮を垣間見し、契りを結んだのである（二六―二三頁）。帝や大宮を初め、両親も勧める女二宮ではあったが、この性急な事の成り行きを知って大宮は驚き、困惑し、病に陥る。それでも一計を案じ、自分が出産したふうに装うことを、大宮は決意する。

「ひめ宮（女二宮）の、まつ消え入らせ給ふにや」と見ゆる御有様なれば、乳母たち、（女二宮を）かかえ奉りて見奉る程に、児のうち泣き給へるは、今少しの心惑ひて、（女房達は）疎き人々を寄せず、ただ、「大宮の、せさせ給へる」と知らせたり。……内裏の御使い、大殿（狭衣の父）よりなど、（見舞いの人々が）立ち騒ぎ、物騒がしかりけれど、（乳母達は）心静め果てて、大宮を子持ちのやうに扱ひ似せ奉りて、姫宮（女二宮）をば、「苦しがらせ給へば」とて、奥深ふおはします。（二五八頁）

女二宮は男御子を出産した。だが、それを知っているのは、大宮と数人の女房達のみである。あくまでも、大宮が出産したことにして、人々には知らせるのである。

女二宮の父（帝）も、この事情は知らない。そのことは、産養の儀式において、

内裏の御使い返り参りて、「かく」と奏すれば、（帝は）「いと嬉し」と聞かせ給ひて、御佩刀や、例の作法どもありけり。（二五八頁）

という帝の心意に窺い得る。

その後、七日夜の祝いも過ぎ、大宮のその後の具合もよくなって、女房たちの心もゆるんだ時に、

夕暮れのほどに、（大宮は）消え入らせ給ひぬる……。 （二六一頁）

と、女二宮を必死に支えた母・大宮は逝去した。世に知られては困る娘の出産を、母親が代って出産を装うという悲しい趣向は、それ以前の物語には見られないものであった。しかし、それも母・大宮の死によって、急速に結末へと向かうこととなる。

大宮の七日ごとの法要（二六三頁）は、四十九日の法要を以って一段落した（二六三頁）。そして、その直後に、女二宮は「そこら多かる宮の

中の人々、泣き合ひたる」(二六六頁)うちに、「その作法ともして鉦うち鳴らし給」(同頁)うと、出家を遂げるのである。それを追うかのようになり、女二宮の若宮が五十日の祝儀を終えたと(一八二頁)、父帝・嵯峨院も、讓位し、出家するのである。(二八九頁)

巻二の初めで、狭衣との密会で始められた女二宮の物語は、母大宮の逝去、父帝および女二宮自身の出家という結末を以って、ほぼ終結したと言つてよい。

主人公狭衣の子供を最初に生んだ女性・女二宮が、早々に出家しなければならない理由とは何か。源氏宮を思慕し続ける狭衣にとっては、女二宮は所詮一時の心の慰めであったということであるのか。それとも、女二宮は出家しても、若宮が誕生したことで、桐壺更衣の如く、後に若宮を中心とする物語の設定を意図していたのだろうか。大宮が死の直前に詠んだ、

雲井まで生ひのぼらなん種まきし人も尋ねぬ峰の若松(一五九頁)

の歌によって、あるいは若宮の物語が展開される構想があったのではないか、とも推察される。狭衣が巻二(一三〇頁)で、女二宮と初めて契りを結んだ場面を初めとして、女二宮は、源氏宮との比較を通して登場する場合が多いこと、また、狭衣が皇位に即くためには、皇女もしくは女御などとの密通事件がなければならない、という三谷榮一氏のご指摘がある(11)。巻一での天稚御子降臨の直後に登場した女性であるという事情も考慮すれば、この女二宮の若宮が、狭衣の即位へ向けて大きく作用する重要な要因であると考えるのは、むしろ当然のことでもある。事実、巻三中段で若宮の袴着、巻四下段で若宮は元服の儀式を迎えるなど、成人後の物語展開の可能性は充分にある。巻二での女二宮の物語の時点では、あるいは作者はそこまで考えていたのかも知れない。その点を含めて、後に改めて考えてみることにする。

(三) 源氏宮の物語二——離れゆく恋——

巻二での通過儀礼のうちで、一例だけ残っていたものがある。一条院の崩御がそれだ。

女二宮が出家した後に、狭衣は再び女二宮の所へ忍び入る。しかし、女二宮は逃れ、それ以上の進展はない。巻二の終わりの部分は、女二宮に替って、源氏宮が再度クローズアップされるのである。それは、

京には、大嘗会など近くなりければ、「源氏の宮、女御代し給ひて、やがて参り給ふべしとある」と聞き給ひて、大将(狭衣)の心の中

は、いかばかりあらん。(二九〇頁)

と、大嘗会を機会に、源氏宮が春宮妃として入内する設定によってである。年中行事の大嘗会を契機として、源氏宮の行動が記され、狭衣の苦悩する心中を、物語の前面に再び押し出そうというわけだ。

ところが、この直後に、一条院が崩御した。

かく言ふ程に、一条院の、この日頃例ならず思しけれど、折節もなければ、忍び過ぐさせ給ふ。折々胸をさへ病ませ給ひて、俄に限りならせ給へるを、うち(新帝)の思し嘆くさま世の常ならず。(一九三頁)

一条院の崩御自体は、文脈上に何ら必然性のない事件だ。だが、その結果、源氏宮の生き方に大きな変化が生じる。斎王の交替が要求されたからである。六例の公事が集中して述べられるのがそれだ。そのうちの三例、つまり、斎院の二度に亘る交替(傍線(1)・(2))、および斎宮の交替(傍線(3))が、次の記事で示される。

(1) 皇太后宮(大宮)の(逝去によって)斎院(大宮の娘・女一宮)の代りに、一条院の後の宮の姫君こそは(斎院に)居させ給ひにしか、(初斎院

の)大膳職に渡らせ給ひしを、(一条院の崩御により)代らせ給ひて、斎宮も下りさせ給ふに、「誰か代りに居させ給ふべき」「女宮もこの頃はおはしませず」「源氏の宮の(春宮妃としての)内裏参りやいかか」など、世人、やうやう言ひ出づるを……。 (一九三頁)

一条院の崩御は、斎院・斎宮の交替を要請し、適当な女宮がいなかったことから、源氏宮の入内までも危うくなる、という構図である。

結果として、賀茂神のお告げの歌、「神代より標引き結ひし榊葉(源氏宮)を我より前に誰か折るべき」(一九四頁)や、占いなどによって、「とかく誰も定むべき方なくて、(源氏宮が斎院に)さだまり給ひぬる」(一九五頁)と、源氏宮の斎院が決定した。同じく「斎宮には、嵯峨野

(嵯峨院)の(女)三の宮ぞ居させ給ひにける」(同頁)となった。

源氏宮は、狭衣の手の届かない所へと遠ざかった。それに対して、狭衣は、「今はなかなか心安くて、明暮妬く心やましき心の中には、あかあかと胸あきぬる心地し給」うと、むしろ、さばさばした気持で居るのである。さらには、狭衣の心が普通の男のように、源氏宮と強引に契ったり、また、女二宮が出家した後に狭衣の相手として話題に上った、妹の女三宮ともし関係を持っていたならば「斎宮・斎院世に絶え給ひてやあらまし」(同頁)とまで思うのである。つまり、斎王の制度に対する作者の感想が、狭衣を通して語られているわけだ。この記述のみ

で作者の批評の質を解くことはすぐには出来ない。ここでは、無論、狭衣を賞賛するために、斎王の件がもち出されているのである。だが、狭衣の思慕し続ける女性を、斎院という手の届かない所に置くという構想は、『狭衣』において重要な要素でなければならない。

源氏宮は斎院禊所での「例の作法の事どもなど」(二〇一頁)の御禊の儀を終えて、初斎院に入った。その後、卷三下段に至って、本斎院の御禊の儀が行われる(三〇四頁)。だが、狭衣との物語は深まらずに、この卷二を以って、源氏宮の物語は、事実上の終幕を迎えたのである。

(四) 飛鳥井女君の物語二——死後に偲ぶ——(卷三)

卷三に記された通過儀礼は一三例(△表1▽△表2▽参照)。そのうち九例が、飛鳥井女君に関わっている。さらに、逝去の記述の六例は、全て飛鳥井女君についてのものであり、その五例が、卷三の上段の部分に記される。つまり、卷三は、卷一の後半を継承して、飛鳥井女君の死を語り、それを偲ぶ物語である。

卷二の最後の部分で、粉河寺に詣でた狭衣は、偶然に飛鳥井女君の兄の僧侶に逢い、女君の生存を知る(二二三頁)。しかし、卷三に入るとすぐに、その僧の行動から、「妹(飛鳥井女君)、さは亡くなりけるにこそ」(二三〇頁)と、女君の死を確信するに至る。そして、それとなく、その程より、睦まじう思ふ僧どもに言ひつけ給ひて、七日七日までの弔ひをぞ、いみじう忍びてし給ひける。(二二一頁)と、その法要を営む。

この後に、出家した女二宮と、洞院上の養女・今姫君の挿話がある。この今姫君は、飛鳥井女君と従妹であるという設定をすることで、飛鳥井女君のその後の情況が語り出される。今姫君の母代の話である。

(飛鳥井女君は)世に知らず美しき子(女子)を生みたりけるは、いかにとかや、その案内え申さじ。明暮物思ひて、さいつ頃、尼になりてこそは亡せ侍りにけれ。(二四〇頁)

飛鳥井女君の女子出産、および、女君の逝去が確認された。狭衣は、女君が居た常磐尼の所を訪れ、女君の兄(僧)に会い、詳しく事情を知り、「明日なん、四十九日になり侍る」(二四三頁)ことも知る。さらに、常磐尼から、女子の行方を聞く。

(女子が)世に知らぬ愛しさを聞かせ給ひて、一品の宮の、いみじうゆかしがらせ給ひしかば、百日の折に、(一品宮の所に、女子を)参ら

せ給へりしを、やがて、(その女子を)留めさせ給ひて、乳母あまたして、思し召しかしづく……。 (二四六頁)

飛鳥井女君の女子は、以外にも、百日の祝いの折から一品宮の所で養育されていた。

生前の飛鳥井女君は、波乱に富んでいた。死して後も、狭衣を初めとする周囲の者の心を騒立たせ、やがて一品宮の人生をも狂わせることになる。しかし、女君は逝去した。狭衣との間に成した女子も、今は一品宮の許に育っている。『源氏』の夕顔にも似た女性として登場した飛鳥井女君は、これもまた夕顔と同様に、主人公の心裡に強くその影を残して去っていく。

卷三の上段、および中段の前半は、飛鳥井女君の記述に専念されているのである。物語の最終部分である卷四下段の最後に至って、
○ 姫君の裳着のこと (四五六頁)。○ 常磐尼君の逝去 (同頁)。○ 飛鳥井女君の供養 (四六二頁)。

の三例の記事による物語がある。だが、それまでの間には、ほとんど記述がないのである。つまり、卷三下段の初めの記事、
年の果てには、かの常磐の(家での飛鳥井女君の法要の)こと、せさせ給ひけり。「志のしるしには、何事をかは」と、経・仏の御様をも、
なべてならずせさせ給ふ。何事も、「日の中に仏にもなるばかり」と思し掟てたり。 (二九七頁)
という、狭衣の心を尽くした供養をもって、実質的な飛鳥井女君の物語は終えることとなる。

(五) 一品宮の物語——望まぬ結婚——

卷三の通過儀礼のうち、三例を残していた。その三例のうちの二例が、一品宮と関わっている。狭衣との結婚である。

(結婚の) その夜になりて、殿・母宮など、(狭衣を) 急ぎて、(一品宮の許へ) いだし奉らせ給ふさま、思ひやるべし。 (二七三頁)

堀川大殿の子息・狭衣と、一条院(堀川大殿の兄)の姫君との婚儀である。盛大であって当然だ。

従兄妹に当たるこの二人の結婚は、すでに二箇月前に決定していた。そして、その契機となったのは、前節で述べた飛鳥井女君の姫君であった。姫君が一品宮の許で養育されていることから、狭衣はその姫君を一目見ようと、一品宮の住居に忍び入った。そこを、一品宮に思いを寄せていた権中納言に見えられ、二人のあらぬ仲を噂されたためであった。

狭衣は、若き日に、一品宮に恋文を書いたこともあった(四〇頁)。だが、それ以後は一切関係はない。ここでの結婚も、飛鳥井女君の姫君

の存在があつて初めて惹起されたものである。その意味では、飛鳥井女君自身の物語は既に終わっていても、その後を引き継いで、姫君の物語が継続しているわけである。つまり、以後の巻三下段において、出家した女二宮の若宮と共に、この姫君の袴着のことが記され（二九〇頁）、また、巻四下段で裳着の儀式が描かれていることなどである（四五六頁）。この点を考慮すれば、一品宮は、これまでの物語において初めて狭衣が正式に結婚した女性ではあるが、その一品宮をも巻き込む形で、飛鳥井女君の物語が継続されている、という見方もできよう。

一品宮と狭衣との婚儀は、その後、

三日の夜の事など、例の事なれば思ひやるべし。（二七八頁）

と、婚礼後三日目の祝いも済ませる。だが、狭衣は、一品宮に後朝の文も書いてはおらず、出家している女二宮に宛てて歌を贈るのである。以後、一品宮との間には子供も生まれず、その仲は冷たい。その結果、一品宮の物語は新たな進展をみることもなく、遙か後の巻四下段で、出家し、薨去する記述を以って（四四三頁）、かろうじて締め括られることとなる。

（六）源氏宮の物語三と女二宮の物語二——初期構想の終結——

狭衣に、一品宮との結婚まで余儀なくさせる要因を胚胎させた飛鳥井女君の物語は、実質的にはすでに終幕している。残されている女性で、狭衣と関わりを持つのは、源氏宮と女二宮ということになる。

源氏宮は、巻二の下段で斎院となったのであるが、巻三下段でまた浮上する。本斎院に入るための御輿の儀式を通してである。

物見車の袖口どもまで、げに、かねて聞きしに違はず、目も輝く事のみ多かり。……めてたぎ年の御輿なり。川原におはしましたる（源氏宮の）御有様など、例のこと（儀式）に事添ひて、長き世の例になるばかりせさせ給ひけり。（三〇四頁）

「長き世の例」ともなるべき、盛大な儀式である。今も源氏宮を思慕し続ける狭衣は、人のいない折を窺っては源氏宮に言い寄る。だが、狭衣を「見だに向かはせ給はぬ」（三〇五頁）源氏宮に対して、狭衣はただ恨むばかりだ。

源氏宮（斎院）は、続いて「祭の日の事ども、例の事なり」（同頁）と、賀茂祭を行う。また、

十一月にもなりぬれば、斎院の相嘗の程、いとど見捨て難くて、御神楽の夜にもなりぬ。例の、殿上人・上達部、（斎院に）参り集ひて、

御前の庭火、おどろおどろしく、風よりもさやかなり。(三二八頁)

と、相嘗の神事、御神樂の細かな描写が続く。華やかな公事(二例)と年中行事(二例)とを背景にして、源氏宮は描出されている。

『狭衣物語』には、一五例の年中行事に関する記事がある(八表2頁参照)。だが、その半数以上は極めて簡単な記述で終わる、その中で、源氏宮に関わるこの二例は、『狭衣』においては特別な描写である。源氏宮がどれ程重要な人物であったかを、そこにも窺い得る。また同時に、ここを以って、源氏宮は物語からほとんど姿を消してしまうのであって、源氏宮の物語のフィナーレとしても、まさに相応しいと言える。このことを受けて、狭衣が出家を決意し、巻三が終わることを思えば、八源氏宮に対する思慕をテーマとする『狭衣物語』は、ここを以って終わると考えてよいのである。

それは、女二宮に対する巻三での描写の仕方からも理解できる。第(二)節で述べたように、巻二下段にある一連の出家・逝去の行事(四例)によって、女二宮の物語は、実質的には終末を迎えていた。その後も、出家した女二宮の許に立ち寄る狭衣の描写は、何度かあった。だが、女二宮が物語の主要なプロットに据えられることはなかった。そして、巻三下段の終わりに近く、源氏宮の斎院御輿の儀・賀茂祭と相嘗の神事とに挟まれる形で、女二宮についての記事が、突如として描かれてくる。

九月には、嵯峨の院に、入道の宮(女二宮)の、作らせ給へる法華の曼陀羅供養せさせ給ひて、やがて、八講行はせ給ふ。……(女二宮が)心尽くしたる甲斐ありて、尊くめでたきにも、おもしろき所多かり。(三一六―七頁)

堀川大殿(狭衣の父)を初め、多くの上達部・殿上人が参列したこの二例の臨時の行事は、先に述べた源氏宮の三例の行事と同様に、実に盛大な様が詳描されている。そして、二つの行事を主催した女二宮は、悲哀に満ちた半生を胸に秘めながらも、「いとど、幻の世(現世)を背き捨てさせ給へる嬉しさを思召されて、御心の中涼しう、心を添へて行はせ給ふ」(三二七頁)と、今の境遇を納得するのである。二例の行事によって導き出されたこの場面は、いわば恨みをのむ女二宮の心に対する鎮魂の意味を持つのである。そしてそれは、女二宮の物語の終結でもあるはずだ。

女二宮は、狭衣の若宮を出産した。しかし、その若宮の物語を引き続き構想していたと思われる要素は認められ得ない。飛鳥井女君の姫君の場合もそうであった。つまり、源氏宮・女二宮・飛鳥井女君などの、狭衣と関わった主要な女性達の物語は、巻三の下段を以って、すべ

て終了したということである。

(七) 女一宮の物語——主題の変更——(巻四)

女一宮は斎院であったが(巻二下段一九三頁)、一条院崩御の折にその任は解けた。しかし、妹の女三宮が斎宮となるのである(二九五頁)。同じく妹の女二宮は、すでに出家の身である(二六六頁)。つまり、先帝の嵯峨院と皇太后宮(大宮)との間には女御子が三人いるのだが、自由の身であるのは女一宮ただ一人なのである。一方、当帝(後一条院)には宣耀殿女御しか后はいなく、御子も一宮ただ一人であることもあって、にわかにな女一宮の入内がクローズアップされた。巻三の下段において、

よき人の御身は、なかなか任せ難かりければ、(女一宮は)心より外にて参りぬ。御局、昔の弘徽殿なり。(三二二頁)

と、あまり気の進まぬままに、女一宮は入内した。

文脈上にはほとんど必然性のない女一宮の突如の入内に含まれる意味は何か。その最大の役割りは、巻三と巻四とを繋ぐ重要な要素であることだ。勿論、それは結果論的視野に立つての謂である。実際には狭衣の出家の意志に絡むプロットが、巻三と巻四とを直接に連続させているのである。だが、それらは、巻三の後半以降において、構想を変更し、物語を継続させようとした作者が、新たに用いた手段であったと見ることができる。物語の基底を流れていた八源氏宮に寄せる狭衣の思慕¹というテーマは、すでに巻三を以って終末を迎えていた。女一宮の入内には、テーマを繋ぎ、展開し得る要因は認められない。さらには、この入内そのものにしても、懸案の女性の処置を施したという意味あいのものであって、入内したという事実を示す記事だけでもし物語が終結したとしても、特に問題を後に残すという質のものでもない。

巻四の上段(三六八～九頁)で展開される、

○女一宮に女御子誕生。○御湯殿の儀式。○女御子の座養。○女一宮中宮となる。

という通過儀礼(三例)・公事(一例)の行事は、入内によって当然惹起される事柄である。だが、これらのために、狭衣を中心とする物語世界が特に変化をするという質のものではない。むしろ、このような理想的な帝(後一条院)と中宮(女一宮)との物語の流れの中に、その帝を譲位させ、また、元服を済ませた(三七〇頁)春宮の存在をも越えて、狭衣を帝位に即かせるという構図には、巻三までの物語を考え合わせ

た場合、どう見ても必然性がないのである。

(八) 宰相中将の妹君（藤壺）の物語——安易なる大団円——

巻四で中心となるプロットは、狭衣と結ばれ、やがて藤壺女御として立后する、宰相中将の妹君の物語である。それは、巻四での通過儀礼一九例のうち、七例までが妹君に関わる記事であることから窺える。

この女性は、巻三の下段において、兄・宰相中将が「たましいの通ふあたりにあらずとも結びやせましたがひのつま」（三一四頁）という歌によって、友人の狭衣にそれとなく結婚を勧めていた人であった。狭衣にも多少はその気があったのだが（三一六頁）、その狭衣の心中を捉えて、作者は「怪しき聖心なりかし」（同頁）と評することで、単なる一挿話として終えていた。

結果的に見れば、巻四を繋ぐ最大の要因はこの女性と狭衣との関係であったということになる。だが、巻三の時点で、作者がどこまでその構想を練っていたかは疑問である。つまり、巻四の上段に入って、女一宮の物語が終わるところから、ようやく妹君との物語は始まっていること。さらには、二人が結婚するために、宰相中将と妹君の母君（式部卿宮上）の出家（上段）、および逝去・法要（中段）といった通過儀礼を踏んでいることである。以上の通過儀礼の記事があることによって、妹君と狭衣との結婚がはじめて可能となるのである。すなわち、逝去に絡む記事の持つ意味の重要な一つは、源氏宮や飛鳥井女君の登場の場面がそうであったように、主要人物を起用する場合の常套手段であった。その方法がここにも用いられているわけだ。物語の初発の部分においてならばともかくも、すでに物語の終末近くになってそれが行われていること自体、自然な構想の帰結とは思われない。つまり、その設定を通して、二人が結ばなければならないという理由が、物語の質的な面から呼び起こされてこないのである。いわば、何らかの理由による作者の苦肉の策なのである。

以後、物語は、

○二人の結婚（中段）。○狭衣即位。○妹君、藤壺として入内。○皇子出産。○女御立后。○皇子の袴着（以上、下段）。

と、華々しい行事が続ける。物語は大団円を迎えたわけだ。しかし、こうして得た物語の終末は、巻三までに描いてきた作品の世界と比べた場合、明らかに異質だ。それを承知の作者が、敢えて巻四を描いた真の理由は何であったのだろうか。当時の読者の要望をそこに推測するこ

とは容易だ。また、物語がその内的要素として本来的に保有し、継承してきた質的な面からの考慮も必要である。そのために、巻四以降の構想の変化を、作者の安易な意識の産物として一途にせめることも、あるいは妥当でないとも言い得る。しかし、少なくとも、ここでの場合は、構想に変化の生じたこと、そして、そこに作者も違和感を覚えていたことは確かだ。それは、巻四下段の最終部分に、

○女二宮の若宮の元服。○飛鳥井女君の姫君の裳着。○常磐尼君の逝去。○飛鳥井女君の供養。

と、たて続けに記述される行事を通して、巻三までの世界を偲び、巻四の物語をかううじて関連づけていることによって理解できる。そして同時に、巻四の中段に一例、下段には五例（すべて狭衣帝）の、計六例の行幸の記事を集中させることによって、その華々しさの中に、巻四までを以って、強引に物語の終幕を計ったわけである。

四 ま と め

巻ごとに主要な女性を登場させていくという方法は、すでに『源氏物語』にみられた。それとほぼ同様の方法を、『狭衣』でも基本的には踏襲している。ただ、『源氏』と比較した場合、『狭衣』は幾重にも重なる複雑な物語の様相は、極力排除している。その結果、女性一人一人の物語プロットが明確なものになっている。同時に、一人一人の女性の物語の結末をも、その都度処理しながら進んでいた。そこに通過儀礼が極端に多用されている理由があったのである。つまり、物語の世界を支える基軸の多くが、通過儀礼という個々の人物の歩む時間的経緯に据えられていたということである。

通過儀礼を多用することで物語世界を構築しようとしたことは、『狭衣』の作者が無意識のうちに獲得した方法であった。しかし、一一年間という比較的短い期間を描きながら、しかも、一人一人の女性の物語を追うという方法をとったことによって、結果的には物語の主題を散漫にした。八源氏宮に寄せる狭衣の思慕Vというテーマを強く打ち出しながらも、『寝覚』が獲得した集中的な物語の世界は描き切れなかった。そこに、和歌的な世界をも求めている『狭衣物語』の方法の限界を考え合わせることも必要である。

巻四に至る構想の変化は、物語全体を通して見た場合、結局失敗であった。それを敢えて行った最大の理由は、いわば安易とも思われる大

団円を目ざした構想そのものに価値を認めたことであらう。三谷栄一氏は、「憶測を交えて言うならば、最初の狭衣物語の構想は、源氏宮への満たされない恋の昇華として、源氏物語の雨夜の品定めに影響された上、中、下品の三人の女性が登場し、特にその中で東宮妃である宣耀殿女御との密通事件によって、狭衣の御子が誕生し、その皇子が皇位に即くことによって、光源氏のように、狭衣自身も皇位に即いたという筋書をもって書き初められたのではないだろうか」と述べている(12)。この推論には、私も強く惹かれる。それは、『無名草子』に、

太上天皇に擬^{なづ}ふ御位は、ただ人も賜はる例もあるを、これ(狭衣)は、今少しくづして(いい加減に)まねびなされたる程に、いと見苦しきなり。さりとて(狭衣は)帝の御子にてもなし。孫王にて父大殿の世より(堀川という)姓賜はりたる人(狭衣)の、(天皇になるという事は)いと浅ましき事なり。なにのいたりなき女のしわざといひながら、むげに心劣りこそし侍れ(13)。

と批判されているように、狭衣が帝となる事件は、このままではやはり無理があるからである。それは、狭衣が皇位に即く重要な基盤であるはずの、女二宮腹の若宮の活躍が欠如していることに大きな原因がある。飛鳥井女君の物語の増大化に伴う構想の破綻であるということもできようが、むしろそこに、最終的には栄華を描くという物語の枠に規制されつつも、その枠を逃れて筆を進めていこうとする作者の意識を考慮する必要がある。ただ『狭衣』の世界を『源氏』藤裏葉巻の世界を思い浮かべ、その模倣であろうとするのは、充分には当たらないであろう。むしろ、宇治十帖での薫的な物語世界の上に終始するのではなく、それを越えようとした作者の営為が、巻四の世界を描かせたのだとも考えられる。つまり、思慕し続けた女性との悲恋を克服して、最高位までも極めたのであって、その意味では、強い男性像がそこに願望されているのである。方法自体は安易であり、また、当時の物語作者が求めてゆきつつあったものとはあるいは異質の世界の構築であったかも知れないが、この世界もまた、読者達の強く希求したものであったのだと思う(享受のレベルからの問題については、改めて述べてみたい)。それを、大団円という、物語の批評にあってはマイナーの響きを持つ言葉で括るのは、あるいは正鵠を射ていないかも知れない。しかし、それほどまでに『狭衣物語』の結末の部分が説得力を得ていないのは、一貫したテーマの流れの中から帰結されたものではなかった、というところに最大の原因があったのである。

- 注(1) 内野吾郎「源氏の影響と王朝物語群」(『日本文芸史素描』二五八頁)。
- (2) 三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』(『日本古典文学大系』解説。一三頁。松村博司・石川徹校注『狭衣物語』(『日本古典全書』七二〇八四頁。内野吾郎、注(1)同書、二五八〇九頁。その他)。
- (3) 拙稿「宇津保物語における場面と時間——行事と歌群との機能——」(『弘前学院大学紀要』第一六号)。
- (4) 松村・石川、注(2)同書。
- (5) 『狭衣』と同時代の『夜の寝覚』、あるいはその後の所謂擬古物語の多くは、強い主題意識があつて物語の筋を引っぱっていく。しかし『宇津保』『源氏』などは、物語全体を一貫して絶えず流れる主題意識は未だ充分ではなく、そこに年中行事等の諸行事が占める役割にも特別のものがある。
- (6) 『狭衣物語』を一〇段に分ける理由は、江戸期の版本が板行に際しての便宜から一〇冊にしたことによるとの説がある(注4同書、六頁)。内容上からは一〇段に区分する必然性はない。ただ、一〇段に区分することでその各々の分量が「日本古典文学大系」本の頁数でほぼ四〇頁前後となり、行事数などを比較する場合に都合がよいので、用いている。
- (7) 拙稿「源氏物語における年中行事の役割」(『国学院大学大学院紀要』第五輯)。
- (8) 注(4)同書、六頁。
- (9) 本文は、三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』(『日本古典文学大系』)による。私意により表記法に手を加えた部分がある。以下同じ。三六頁。
- (10) 『宇津保』の後蔭の女、『源氏』の桐壺更衣・藤壺・若紫・夕顔・浮舟その他、多少の差はあるが、いずれも後見すべき人がいなかったり、いてもそれほど力の力となり得ない人々の中に生い育っている場合が極めて多い。そこに民俗学的立場からは、継子譚的要素が指摘されている。
- (11)(12) 三谷栄一「狭衣物語の構想と構成」(『国学院雑誌』昭和四三年十一月)。
- (13) 富倉徳次郎『無名草子評解』一五四頁。